

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 許 永新

『日本語の構文と自・他動詞のプロトタイプ』は、日本語のいくつかの構文の分析を通して、自動詞と他動詞のプロトタイプの意味を詳細に記述することを目指した労作である。

「第1章 日本語における自・他動詞とは」では、日本語における自動詞と他動詞の定義には三つの異なる立場があるとした上で、先行研究の問題点を指摘している。「第2章 基本概念から見る日本語の特徴」は、参与者と項、ヴォイスの概念について検討し、中国語と対比しつつ、日本語の特徴を述べている。「第3章 非意図的他動詞構文」は、自動詞文と他動詞文がほぼ同義であると考えられる場合をどのように分析すべきかについて検討し、そのような場合に見られる特徴を明らかにする。「第4章 日本語と中国語の心理動詞」は、日本語における心理形容詞と心理形容詞+「がる」との用法の違いを説明した上で、日本語と中国語における心理動詞の自他の分類を提案している。「第5章 日本語における有対自・他動詞と関連表現」は、日本語における有対自・他動詞とそれに対応する使役文・受身文との使い分けを考察している。まず、使役主が被使役者または事態をコントロールしているかどうかが他動詞と自動詞使役形の使い分けを決めることを主張する。次に、日本語の受身文は、主語の指示対象が単にある状態に置かれる場合でも成立するため、主語の指示対象が動作からの明確な影響を受けていなくてもよい、と論じている。「第6章 ヲ使役とニ使役」は、自動詞使役文におけるヲ使役とニ使役の使い分けの原理を提案している。「第7章 日本語における介在文」は、介在文に関する従来の定義を見直し、独自の特徴づけを行った上で、日本語の介在文の成立条件を明らかにする。「第8章 自・他動詞のプロトタイプとは何か」は、前章までに提示したさまざまな概念や構文の分析を通して、日本語の自動詞と他動詞のプロトタイプの意味を詳しく規定している。自動詞のプロトタイプには+autonomy という特徴が、他動詞のプロトタイプには+distinction, +volitionality, +control という特徴が、それぞれあることを主張している。

日本語動詞の自他はこれまでもさまざまな立場からいくつもの注目すべき分析が提案されてきたが、本論文は、日本語の自動詞と他動詞をめぐる多様な現象を、時に中国語の対応する現象と対比しつつ、自動詞と他動詞の(究極的には他の多くの言語にも適用可能と考えられる)プロトタイプの意味と関連づけることによって詳細に記述することを試みた点が、最大の貢献であると考えられる。考察の前提となる自動詞および他動詞のカテゴリーの全体像に関する議論が十分に尽くされていないこと、また、それに関連してプロトタイプと非プロトタイプの関係が明瞭に論じ切れていないこと、さらには、結論の述べ方が性急で論理がたどりにくいことなど、いくつかの課題を残しはするものの、それらは論文全体の価値を著しく損なうものではない。

以上の理由により、本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するものと判断する。